# 戦略的創造研究推進事業 (社会技術研究開発) 平成29年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」 研究開発領域

研究開発プロジェクト 「ジェネラティビティで紡ぐ 重層的な地域多世代共助システムの開発」

研究代表者 藤原 佳典 (東京都健康長寿医療センター研究所 研究部長)

## 目次

1. 研究開発の実施内容	2
1 - 1. プロジェクトの達成目標	2
1 - 2. ロジックモデル	
1 - 3. 実施方法・内容	7
1 - 4. 研究開発結果・成果	
2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	28
3. 研究開発実施体制	30
4. 研究開発実施者	31
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	34
5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	34
5-2. 論文発表	35
5-3. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表)	35
5-4. 新聞報道·投稿、受賞等	36
5-5. 知財出願	37

## 1. 研究開発の実施内容

## 1 - 1. プロジェクトの達成目標

(1) 全体目標およびリサーチ・クエスチョン

#### ①全体目標

本プロジェクトで目指す最終的なビジョンは、「子どもの健やかな成長の喜びを全ての世代が共有できるまちづくり」である。本プロジェクトでは、将来への時間軸としてのジェネラティビティ(次世代継承への意識・行動)をその価値観として市民が共有すべきと考える。そのためには、子育て世代と中高年世代が他世代のニーズも理解し相互扶助の精神を共有する必要がある。子育て世代にとっては、託児等の支援が必要であり、一方、次世代への支援を期待される高齢者世代にとっては、まずは自身の生活自立の延伸が最優先課題である。日常生活の互助により高齢者の自立生活を維持することは国家予算の多くを占める高齢者のための社会保障費(医療費・介護費)の軽減、それによる保育・教育費への転嫁という点で間接的な次世代支援ともいえる。

このような実質的な課題を同時に解決する研究開発活動として、本プロジェクトでは東京都北区志茂地区および神奈川県川崎市多摩区中野島地区にて、情緒的相互支援(多世代挨拶運動)、多世代交流を基盤とした多世代住民間互助の確立、多様な背景をもつ子どもへの学習・居場所支援による生活基盤の改善に取り組んでいる。これらの取り組みは、生活線上での多世代交流機会の増加だけでなく、情緒的・手段的相互支援や、生活困窮家族においては生活基盤や就労状況の改善といった短期的アウトカムにつながることが見込まれる。その結果、長期的アウトカムとしてジェネラティビティの共有・確立にも結びつくと考えている。

#### ②変更点

当初計画においては、上記課題を解決する研究開発活動として、民間のシステムを基盤とした多世代間で互助をマッチングすするウェブシステム(以降「よりあい」)の開発・実装を試みた。しかし、「よりあい」の試行において、特に高齢者の「よりあい」利用に必要なデバイスの普及率や、デバイスの限定的な利用実態など様々な課題があがったため、「よりあい」に限定しない当事者同士の助け合いに関する仕掛けや仕組みを開発していくこととなった。このため、「よりあい」は小規模にその普及可能性を中心に検証をすすめていくこととなった。

#### ③達成目標

本研究では以下4つの達成目標が設けられた開発事業をとおして、このビジョンを達成する。

●達成目標 1 [情緒的相互支援]:世代間の緩やかなサポートネットワークの形成による世代間の信頼の高まり

目標:子育てや高齢者分野で活動している既存の住民ボランティアにジェネラティビティ を啓発する研修を実施し、高齢者と子ども・子育て世代の間で、声かけや見守りの 支援が相互になされる世代間の緩やかなサポートネットワークが形成される「中高年から始める多世代挨拶運動(以降、多世代挨拶運動)」活動を実装する。それにより一般の大勢の住民の中で緩やかなサポートネットワーク形成による世代間の信頼感の高まりを期待する。

●新達成目標2:多世代交流を基盤とした多世代住民間互助の確立

【達成目標2と3の修正について】

\*当初計画の達成目標2(手段的相互支援)と3(社会参加支援)を統合し、新達成目標2 とした。

北区志茂地区と川崎市多摩区の両モデル地区にて、「まち・人・くらしプロモーター (まちプロ)」を担い手とし、地域の関連機関(子育て支援センター、地域包括支援センター、社会福祉協議会(以降社協)等)、NPOや企業等と連携し、多世代交流プログラムを企画・運営する。多世代交流の場において当事者同士で助け合いに関するマッチングを行える仕掛けや仕組みを開発する。「まちプロ」は交流プログラム内で、参加者同士の交流と助け合いを促す「つなぎ役」となる。

多世代交流プログラムを基盤とした互助の仕組みづくりにより達成が期待される成果として、1)日常生活の延長線上での気軽な手段的相互支援の授受促進、および、2)地域の多世代住民間での交流機会の増加によるジェネラティビティの醸成である。

●達成目標 4 [生活基盤、学習支援、居場所支援]: 多様な背景をもつ子どもへの学習・居場所支援による生活基盤の改善

目標:平成27年度に実施した先行研究レビューおよび事例調査を踏まえ設定目標を、多様な背景をもつ子どもに対する学習支援および居場所支援により生活困窮家庭を含む多様な背景を持つ家庭を多世代の住民間で緩やかに支援する生活支援サービス提供モデルおよび多世代交流プログラムの開発へ変更した。具体的には、多世代交流の場とそこで生まれる互助(新達成目標2)に、多様な背景をもつ子どもとその保護者も自然に参画できることを目指す。

#### 4 リサーチクエスチョン

(達成目標1に対して)

**Q1.** 地域における世代間の信頼感は、世代間の緩やかなサポートネットワークを形成することにより高めることが出来るのか?

(達成目標2に対して)

- Q2. 多世代交流の場にて、高齢者世代と子育て世代が何らかの協働作業を積み重ねるプログラムとその中で両世代を積極的に繋ぐ人材がいれば、両世代の交流が発生するのか?・
- Q3. 多世代交流の場にて、個人の生活上の課題を顕在化させる仕掛けがあれば、支援ニーズ

は顕在化するのか?

- **Q4.** 顕在化したニーズは、他者への支援を求める仕掛けがあれば交流プログラム内で互助のマッチングは成立するのか?
- Q5. 子育て世代ならではの高齢者支援とは何か
- Q6. 高齢者世代が抵抗感なく参画できる子育て支援と何か

(達成目標4に対して)

Q7. 多様な背景をもつ子どもへの居場所・学習支援の充実は、困窮家庭の生活基盤の改善につながるのか?

(達成目標1、2、4に対して)

- **Q8.** 各協議会メンバーとその所属団体にとって他分野との連携が自組織の活動にメリットがある事を実感・認識すれば、横断的連携が醸成・維持されるのか?
- **Q9.** 多分野の組織が多世代共創を目的としたプログラムやイベントの開発・運営において 協働することで、横断的連携は進むか?

#### (2) 平成29年度の目標

- ●達成目標 1 [情緒的相互支援]:世代間の緩やかなサポートネットワークの形成による世代間の信頼の高まり
  - 北区志茂地区にてあいさつさんを募集し、地域でのあいさつ活動を展開する。
  - 多摩区にて、多世代交流活動の一環として実施するウォーキング講座修了者が、挨拶 運動を展開する。
- ●達成目標 2 [手段的相互支援と社会参加支援]: 多世代交流を基盤とした多世代住民間互助の確立

「よりあい」を両モデル地区にてフル稼働を目指すとした当初年度目標を変更し、多世代の地域住民が継続的な交流から互助が生まれる場づくりに必要な要件を解明することを新しい目標とした。具体的には交流の場で3つの方策を検証する;1) どのような仕掛けや仕組みがあれば多世代の住民が多世代交流の場に集まるのか、2) どのような運営方法があれば集まった人々の間で自然な交流を促すことができるのか、3) どのような運営方法があれば交流の中で互助を促すことができるのかである。

また、高齢者の家族(子ども等)が高齢者に代わり「よりあい」を通して親の日常生活支援を依頼するモデルを試行する。それにより、子どもを介した場合には「よりあい」が普及するかも検証する。

- ●達成目標 4 [生活基盤、学習支援、居場所支援]:多様な背景をもつ子どもへの学習・居場所支援による生活基盤の改善
  - 平成28年度に引き続き多世代交流の場とそこで生まれる互助に、多様な背景をもつ子 どもとその保護者も自然に参画できることを目指す。
- ●達成目標1、2、4に向けて:協議会の継続体制と地域での役割の明確化
  - ●最終年度に向けて、両区での事務局体制及び協議会の長期的な位置づけの明確化を、 協議会メンバー及び関連する行政担当部署、地域団体と協議して進める。

研究開発プロジェクト年次報告書

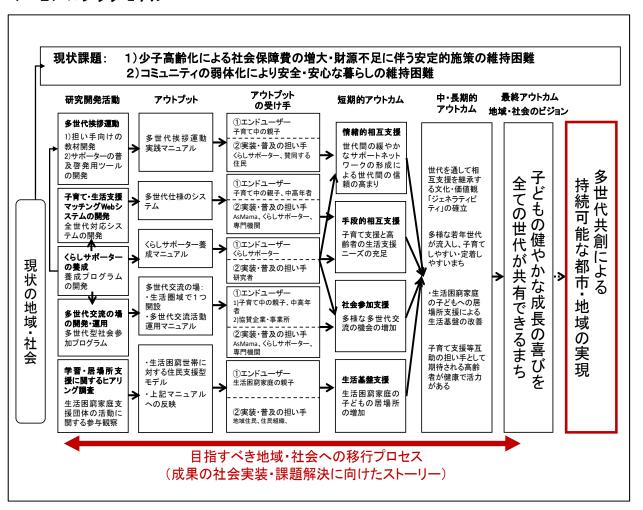
#### (3) 背景

わが国は今後、急速な少子高齢化や人口減少、財政縮小が予想される。市町村が安定し た施策を持続するためには歳出の約60%を占める社会保障費の増大を抑制する策を講じる 必要がある。平成24年、国は社会保障制度の持続のためにその基盤を維持する少子化対策 を就労、結婚、妊娠、出産、育児の各段階に応じて切れ目なく支援する「子ども子育て支 援法」を制定した。高齢者支援においては、平成27年度より施行された総合事業により、 高齢者の日常生活を介護保険制度外で支える仕組みの拡充が進められることとなった。し かし、その財源確保のためには医療・介護給付費の伸びを抑制し、財源を子育て支援と高 齢者施策に有効に配分する必要がある。これらの国策は市町村の裁量で具現化されるよう 法整備は進んでいる。しかしながら、保健福祉分野で先進的なモデルをいち早く実装して きた自治体においても、子ども・子育て支援策や高齢者施策の推進を阻害する共通のボト ルネックが存在する。それは、限られた財政の下、多様で複雑化した子育て世代と激増す る中高年世代の生活課題を支援できる資源や人材の確保である。その解決策は資源や人材 を世代別から多世代対応へ統合し集中することである。更に統合と集中のボトルネック は、行政施策の過度な縦割りに加えて、互助共助においては社会保障負担の世代間格差の もと、自己の世代の利益のみを優先しようとする潜在的な「世代間対立」と考える。逆 に、全ての世代が統合と集中に合意・協調してこそシナジー効果が得られる。しかし、核 家族化等の影響により多世代が交流する機会が減少する現在では、新たな世代間共創の価 値観とそれに基づく仕掛けを創出する必要がある。

平成29年度 「ジェネラティビティでつむぐ重層的な地域多世代共助システムの開発」

研究開発プロジェクト年次報告書

#### 1-2. ロジックモデル



#### 1 - 3. 実施方法 内容

#### (1) 実施項目の全体像

本プロジェクトでは、「子育てに関する地域の理解や許容不足」、「出会いのきっかけ不足や社会的孤立」、「緊急時や日常生活の支援」といった、特に高齢者と子育て世代が抱える課題を解決するため図 1のとおり実施している。

第一に、心の支え合い(情緒的支援)として、世代間による挨拶運動やキャンペーンを通して声かけや見守りによる「ゆるやかなつながり」を目指している。第二に、交流と居場所づくり(社会参加)として、多世代交流プログラムや居場所を展開し、地域の子育て世代と高齢者世代が顔見知りになり、信頼関係が構築されるようなプログラムを展開している。第三に、両世代がお互いに、日常生活における困り事を支え合う(手段的支援)ことが出来るような仕掛けや仕組みづくりを目指している。

これら3つの取り組みを重層的に地域で行うサポーターとして、まち・人・くらしプロモーター (通称まちプロ) を養成しており、多世代交流プログラムや居場所の企画や運営、参加者をつなげる活動を担っている。また、各モデル地区にて、行政機関、地縁組織、民間企業などから構成される協議会が運営されており、プロジェクトの目標にもとづいた実施計画の策定から、必要な広報やまちプロの支援、各プログラムの推進、実施事項の評価と改善 (PDCAサイクルの回転)を行っている。

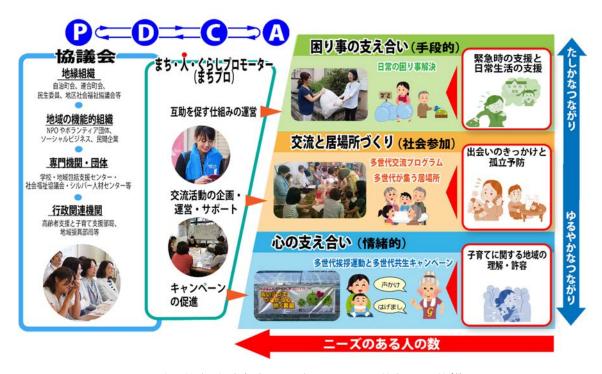


図 1 重層的な地域多世代共助システムの仕組みと仕掛け

## (2) 各項目の実施内容

#### ①達成目標1、2、4にむけて

(29年度目標)協議会の体制の確立と既存の様々な会議との連携の可能性を探る。

Task1. 協議会の体制確立と既存会議との連携

平成29年度は、北区で9回(平成29年4月~10月は2ヶ月に1回、平成29年11月~3月は毎月1回)の協議会と4回の作業部会を(表 1)、多摩区では7回の協議会を実施した(表 2)。

平成29年度 「ジェネラティビティでつむぐ重層的な地域多世代共助システムの開発」 研究開発プロジェクト年次報告書

## 表 1 北区志茂ジェネ協議会及び作業部会記録

年月日	名称	場所	概要
2017/4/28	北区志茂地区協 議会(第 15 回)	志茂地域振 興室会議室	多世代交流イベントに関する報告、「よりあい倶楽部」の現状と課題、新規イベントの企画について
2017/6/1	多世代交流(緩 やかなつなが り)部会(第1 回)	志茂地域振 興室会議室	挨拶運動の進め方・スケジュール、プロ ジェクト周知・広報方法、「志茂ジェネ まつり」の企画
2017/6/13	多世代交流 (確 かなつながり) 部会 (第1回)	志茂地域振 興室会議室	「よりあい倶楽部」の運営について、よ りあいプロモーション方法、「まちプ ロ」活動について
2017/6/30	北区志茂地区協 議会(第 16 回)	志茂地域振 興室会議室	作業部会からの報告および検討、「まち プロ」および多世代交流関連の報告、地 域団体イベントへの参画について
2017/7/21	多世代交流(緩 やかなつなが り)部会(第2 回)	志茂地域振 興室会議室	「あいさつアンバサダー (仮)」募集説明会、「北区つながり創造プロジェクト」への参加、「志茂ジェネまつり」の企画
2017/8/25	北区志茂地区協 議会(第17回)	志茂地域振 興室会議室	作業部会からの報告、「北区つながり創造プロジェクト」の内容検討、「まちプロ」および多世代交流関連の報告
2017/9/22	多世代交流 (緩 やかなつなが り) 部会 (第3 回)	志茂地域振 興室会議室	「北区つながり創造プロジェクト」の報告、「あいさつさん」募集説明会について
2017/10/27	北区志茂地区協議会(第18回)	志茂地域振 興室会議室	イベント・打ち合わせ等報告、「まちプロ」イベントの企画状況、「よりあい倶楽部」の運営状況、プロジェクト終了に向けた、協議会等の継続に関する検討
2017/11/24	北区志茂地区協 議会(第 19 回)	志茂地域振 興室会議室	プロジェクト終了後にむけた協議会等の 体制に関する検討、志茂ジェネまつり
2017/12/22	北区志茂地区協議会(第20回)	志茂地域振 興室会議室	志茂ジェネまつりについて
2018/1/26	北区志茂地区協 議会(第 21 回)	志茂地域振 興室会議室	あいさつさんミーティングの報告、プロ ジェクト終了後に向けた協議会等の継続 に関する検討、志茂ジェネまつり
2018/2/16	北区志茂地区協 議会(第 22 回)	志茂地域振 興室会議室	志茂ジェネまつりに関する最終確認、三 丁目自治会館での多世代交流の場づくり (案)について
2018/3/9	北区志茂地区協 議会(第 23 回)	志茂地域振 興室会議室	「北区子育てメッセ」の報告、「第1回 志茂ジェネまつり」の報告と振り返り、 多世代交流の場(常設型)の開拓と運用

#### 表 2 多摩区中野島多世代つながり愛プロジェクト協議会記録

年月日	名称	場所	概要
2017/5/8	第 12 回多摩 区中野島地区 協議会	中野島会館	28 年度に実施した調査結果の報告
2017/8/7	第 13 回多摩 区中野島地区 協議会	多摩川住宅第 一集会所	プロジェクト終了に向けての今後の展 開についての話し合い
2017/10/23	第 14 回多摩 区中野島地区 協議会	中野島会館	プロジェクト終了後の運営体制の検討 ならびに中野島つながり愛フォーラム の企画
2017/11/13	第 15 回多摩 区中野島地区 協議会	中野島会館	新規運営体制 (事務局) の検討ならび に中野島つながり愛フォーラムの準備
2017/12/14	第 16 回多摩 区中野島地区 協議会	中野島住宅集会所	中野島つながり愛フォーラムの準備
2018/1/29	第 17 回多摩 区中野島地区 協議会	中野島会館	中野島つながり愛フォーラムの準備
2018/3/19	第 18 回多摩 区中野島地区 協議会	中野島会館	中野島つながり愛フォーラムの報告な らびに新規運営体制の再検討

#### ②達成目標 1 [情緒的相互支援] にむけて

#### (29年度目標) 多世代挨拶運動を中核となって推進する担い手の育成

#### Task2. 多世代挨拶運動の展開

「中高年から始める多世代挨拶運動」(以下、挨拶運動)は、図 1の「心の支え合い(情緒的)」を目的として実施するプログラムである。平成29年度は、以下の活動を実施した。

#### 【東京都北区志茂地区】

- 平成28年度に公募したロゴ・標語を用いたグッズを地域住民に配布し、挨拶運動および プロジェクト全体のPRを行った。
- 本プロジェクトの目的に賛同し、地域で挨拶を実践する住民ボランティアを「あいさつさん」として募集し、モデル地区内で約70名の登録者を集めた。2回の募集説明会を開催するとともに、定例ミーティングを1回実施し、地域の実情に即した効果的な挨拶運動の進め方を検討した。活動中は写真 1のような名札をさげて挨拶運動を実施する。
- 昨年度と同様に、北区及び川崎市多摩区でのキャンペーン推進ツールとして、ウェブサイトやSNSを運用し、それぞれの地域での活動状況や住民インタビューなどをまとめた動画等を掲載した。



写真 1「志茂ジェネあいさつさん」が活動中さげる名札

## 【川崎市多摩区中野島地区】

- 多世代住民間で挨拶をしあうことの意義を伝えるミニ講座 (15 分程度) のカリキュラムを作成し、モデル地区の町会の定例会 (多摩区 1 自治会) にてミニ講座を試行した。
- 地域イベントである中野島音楽祭(2017年7月)、多摩川住宅避難訓練(2017年9月) にて、同ミニ講座の内容をパンフレット形式にした資料とリング(挨拶運動参加者であ ることを見える化したリング)、28年度に募集したロゴマークを使って作成した缶バッ ジを配布した(写真 2)。



写真 2 中野島地区での挨拶運動やキャンペーンのグッズ

● 多摩区では標語とロゴを記した横断幕を作成し、駅前、各学校の校門に掲示している。 入学式にて挨拶運動を実施し、本プロジェクトのグッズを新入生ならびに保護者へ配布 した(写真 2)。

- ビブスや腕章を作成し、地域の見守り隊やPTAの下校指導にて着用している。
- 地区の小中学校の PTA 役員会議にて、本プロジェクトの説明ならびに挨拶の重要性についてミニ講座を実施した。
- 地区の小学校の朝会にて、協議会メンバーが挨拶の重要性について説明した。
- 本プロジェクトおよび挨拶運動の学校への波及効果を検証することを目的に平成 30 年 3月に児童・保護者・教職員を対象とした無記名自記式調査を実施した。

## ③達成目標 2 [手段的相互支援と社会参加支援] 多世代交流を基盤とした多世代住民間互助 の確立

(29年度目標)よりあいの実装から変更し、多世代の地域住民が継続的な交流から互助が 生まれる場づくりに必要な要件を解明することを新しい目標とした。

Task3. よりあいの実装

平成29年度当初は「よりあい」の本稼働に向けて、新たに以下3つの開発活動を試みた。

- 「よりあい」導入に至る前段階として、多世代交流プログラムの中で世代を超えた互助 を体験できるグループワーク「お互いさまゲーム」を開発した。
- 北区では、シニア世代の「よりあい」登録者を増やすため、「シニアのためのスマホ講座」を実施した(主催:志茂ジェネ協議会/東京都健康長寿医療センター研究所、協力:NPO法人シニアSOHO世田谷)。講座は表 3のとおり全5回実施した。受講者は15名であった(定員15名)。

日にち	口	内容
2017/10/10	第 1 回	iPhoneの基本操作に慣れよう!
2017/10/17	第 2 回	いつでもどこでもネットで調べよう
2017/10/31	第 3 回	仲間とつながろう1
2017/11/7	第 4 回	仲間とつながろう2 LINEを使ってみよう
2017/11/14	第 5 回	スマホを安全に使うために:セキュリティーについて

表 3 シニアのためのスマホ講座内容

※上記の日程に加えて、フォローアップ講座を開催し、参加者に「よりあい」登録方法 の解説を行った。参加者は3名であった。

● 「よりあい」の紹介VTRを作成し、「よりあい」普及の一助とした。

#### Task4. まち・人・くらしプロモーターの養成

地域人材として「まち・人・くらしプロモーター」(以下、まちプロ)を第1期に続き養成した。まちプロの役割は、①多世代交流プログラムの企画と運営、②多世代交流プログラム内での参加者間の交流促進、③多世代交流プログラム内での互助を促す仕組みの運営(図1)。

● 両モデル地区にて、まちプロ 2 期生の養成研修の実施および 1・2 期生の活動支援を行った。カリキュラムは表 4 のとおり実施し、平成 28 年度カリキュラムを修正し、回数

を減らした。高齢者支援、子育て支援、および多世代交流のカリキュラム終了時に各領域の習得度を確認するためのテストを実施した。3領域のテスト修了者に「研修修了証」を付与した。北区では16名が受講し、11名が修了証を得た。

内 容 П 説明会(オリエンテーション) まち・人・くらしプロモーターについての説明 第0回 ・高齢者世代の現状 ・子育て世代の現状 子育て支援について ・子ども・子どもへの関わり方の理解 第1回 親・親への関わり方の理解 高齢者支援について 第2回 ・高齢者の身体と心 コミュニケーションの理解 多世代交流についてI 第3回 多世代交流の意義と企画方法 ・演習:多世代交流の意義と展開 多世代交流についてⅡ ・多世代交流の運営と評価方法 第4回 ・演習:多世代交流の実際 まとめ 第5回 「まちプロ」の活動について

表 4 第2期まちプロ研修カリキュラム

● 各モデル地区にて多世代で構成されるまちプロ研修受講者が、第1期生・第2期生ともに 上記①~③の役割達成に向けて活動を開始した。

#### 【川崎市多摩区中野島地区】

● 北区と同様に、まちプロ研修を実施し、13名が受講し、4名が修了証を得た。

#### Task5. 多世代交流プログラムの運用

両モデル地区にて、図 1における「交流と居場所づくり(社会参加)」に該当する多世代 交流イベントの開催と常設型の居場所づくりに取り組んだ。

#### 【東京都北区志茂地区】

● 多世代交流イベントの実施方法は、①まちプロの企画・運営によるイベント開催、②協議会主催によるイベント開催、③地域活動団体もしくは行政が主催するイベントへの参画の3種類に大別される。各モデル地区における平成29年度の実施状況は、表 5のとおりである。

表 5 北区志茂地区多世代交流イベント

地区	イベント名	実施日	内容	参加人数
①まちフ	プロの企画・運営による	イベント開催	É	
北区	多世代でつなが る・支える 志茂三 丁目防災イベント	2017/7/4	子育て世代と中高年・シニア世 代がグループとなり志茂三丁目 「小柳川公園」の防災設備の使 用方法などを体験した。	19名
②協議会	≩主催によるイベント開	月催		
北区	第1回 志茂ジェネ まつり〜多世代で 楽しむひな祭り〜	2018/3/3	多世代交流や多世代共生の重要性を地域住民に広く啓発することを目的に、地域住民や団体の有志からなるイベントを開催した。	99名
③地域沿	<u>-</u> - - - - - - - - - - - - - - - - - -	『主催するイ〜	ドントへの参画	
北区	北区つながり創造 プロジェクト 〜多 世代でつくる未来 〜	2017/9/10	志茂ジェネ協議会として参加 し、消防団などの地域活動につ いての紹介を行うブースを実施 した(主催:東京青年会議所北区 委員会)。	84名
北区	北区子育てメッセ	2018/2/23, 2/24	「志茂ジェネ」として参加し、シニア世代と多世代交流をしながらひな飾りを作成するブースを実施した(主催:北区子ども未来課、子育てママ応援塾ほっこり~の)	50名

● 上記の多世代交流イベントの開催とあわせて、各モデル地区で常設型の居場所づくりを展開した。北区では、平成29年度に株式会社ほっこり~のプラス(以降ほっこり~の)が研究開発者として本プロジェクトに参画し、まちプロと協働して多世代交流サロン「よりあい倶楽部 ~かよう広場~」(以下、よりあい倶楽部)でのプログラム企画・運営を行った。よりあい倶楽部はほっこり~の志茂店を会場として、平成28年4月11日から平成30年3月27日までの期間中、毎週火曜日(10:30~15:30)に計51回の講座を実施した。延べ参加者数は172人である。

## 【川崎市多摩区中野島地区】

- 表 6のとおり多世代交流プログラムを実施した。2017年6月より毎月第一水曜日に上布 田つどいの家にて上布田カフェを実施している。
- 同年12月より月2回ポールウォーキングの活動を実施している。ポールウォーキングは、9月から全6回実施した、ポールdeウォーク講座の事後活動として実施しており、毎回10から15名程度の参加がある。
- 2018年3月から月2回、中野島公民館にて「中野島ファミリーカフェ」を実施し、ストレ

名程度

会で講座と交流プログラム

を実施している。

ッチ体操や笑いヨガのプログラムをとおして世代間の交流を実施している。

開催日 名称 場所 概要 参加人数 まちプロが主体的に運営す 2017年6月よ 上布田つど る多世代交流のサロン。各 各会 15-20 り毎月第一水 上布田カフェ いの家 会で講座と交流プログラム 名程度 曜日に実施 を実施している。 2017年9月 25 日から11 ポール de ウ ノルディックウォーキング 月27日の隔 多摩川の里 36名 オーク講座 の講座を通した多世代交流 週月曜日に開 催(全6回) 2017年12月 ポール de ウ ポール de ウォーク講座の受 から第二月 毎回 10-15 ォーク自主活 多摩川の里 講生を中心とした自主活動 曜 • 第四水曜 名程度 動 グループとして運営 に実施 まちプロが主体的に運営す 2018年3月か 中野鳥ファミ る多世代交流のサロン。各 毎回 15-20

表 6 多摩区中野島地区多世代交流イベント

## ④達成目標4[生活基盤、学習支援、居場所支援]:

リーカフェ

(29年度目標)多様な背景をもつ子どもとその保護者も自然に参画できる場づくり 平成28年度に引き続き多世代交流の場とそこで生まれる互助に、多様な背景をもつ子ども とその保護者も自然に参画できることを目指した。

中野島会館

Task6. 多様な背景を持つ子の居場所・学習支援にむけて

● 北区では、社会福祉協議会が主催する子ども支援ネットワーク交流会へ参加し、区内で子どもの居場所・学習支援に取り組む他の地域活動団体や個人とネットワークを形成した。

#### ⑤達成目標 1, 2, 4にむけて

(29年度目標)各開発活動の検証とマニュアル作成

Task-7. 評価

ら第二・四金

曜日に実施

- 協議会の運営方法の妥当性、および各回のテーマに関するメンバーの理解度や共感度を 検証するため、各協議会終了時にアンケート調査を実施した。
- 多摩区では、本プロジェクトおよび挨拶運動の学校への波及効果を検証することを目的 に、平成30年2月~3月に児童・保護者・教職員を対象としたフォローアップ調査(無 記名自記式調査)を実施した。
- 北区はモデル地区での介入のスケジュールが後倒しになっていることと、校舎移転等の 時期と重なり、学校側の調査実施体制が整わなかったことを背景に、平成30年度に同調 査を実施する。

● まちプロ研修にて、研修カリキュラムの妥当性を受講生の視点から検証するためのアンケート調査を実施した。

#### 1 - 4. 研究開発結果・成果

(1) 明らかになったこと

(達成目標1に対して)

- Q1. 地域における世代間の信頼感は、世代間の緩やかなサポートネットワークを形成する ことにより高めることが出来るのか?
  - →あいさつさんの養成や、大きな地域イベントをとおして、モデル地区でのネットワ
  - ークの広がりを感じられた年度となった。一般的な地域住民同士のサポートネットワ
  - ークの形成は不十分であるが、既存の団体に所属している住民同士は、プロジェクト の活動をとおしてネットワークのつながりと信頼感が醸成されている。

## (達成目標2に対して)

- Q2. 多世代交流の場にて、高齢者世代と子育て世代が何らかの協働作業を積み重ねるプログラムとその中で両世代を積極的に繋ぐ人材がいれば、両世代の交流が発生するのか?
  - →協働作業を積み重ねるプログラムを体験することは、世代間の交流には有効であることは、様々なタイプのプログラムを実施して明らかになったと言える。また、積極的に繋ぐ人材は交流には不可欠である。一方、そうしたプログラムの展開方法や、交流の進め方は明確なものではないことから、プログラムの内容や進め方に関する知見の蓄積と明文化が必要である。
- Q3. 多世代交流の場にて、個人の生活上の課題を顕在化させる仕掛けがあれば、支援ニーズ は顕在化するのか?
  - →交流の場で各世代が自身の「 困り事」をイメージ出来ないことから、お互いさまゲームを開発・導入した。お互いさまゲームは、ファシリテーターの進め方により困り事を顕在化させるのには一定の効果があった。一方で、一回のグループが 7 名以上等の大人数である、十分な交流が図られなうちに導入すると発言出来ない高齢者がいる可能性も示唆された。以上のことから、ゲーム実施のグループサイズやタイミングを熟慮する必要があると考える。
- Q4. 顕在化したニーズは、他者への支援を求める仕掛けがあれば交流プログラム内で互助のマッチングは成立するのか?
  - →お互いさまゲームではニーズがある程度、顕在化出来たが、助け合いまでには至らなかった。交流プログラムに継続的に参加し、ある程度、参加者間での会話が弾むようになった際に、顕在化したニーズに助けを申し出る可能性が示唆された。また、ニーズが顕在化した際に、まちプロがどのように声掛けするかを明確化することも必要と考える。
- Q5. 子育て世代ならではの高齢者支援とは何か
  - →スマホ講座にて実施した子育て世代のサポートは、子育て世代ならではの高齢者支援の一例として潜在的なニーズが大きいことが明らかになった。一方、子育て世代でも

乳幼児を抱える親は身体的な制限が高齢者以上に高い場合が多い。

Q6. 高齢者世代が抵抗感なく参画できる子育て支援と何か

→子育て世代は、買い物時に同伴し、荷物を運ぶ支援や子どもを一時的に見る支援のニーズが多い。こうした支援は、自宅外で行われる支援で、買い物という行為に楽しみが見いだされることから抵抗感がないものと考えられる。また、居場所にて、子どもに対しての読み聞かせや見守りも、抵抗がない支援と考えられる。多世代交流プログラムでは、縫物が得意な高齢者を中心にクリスマスの飾り等を作成した。そこでは、子育て世代が高齢者に代わり針に糸を通し、高齢者が子育て世代に縫い方を教示する光景が見られた。以上のことから、縫物を通した支援は両世代が受け入れやすい可能性がある。

#### (達成目標4に対して)

- Q7. 多様な背景をもつ子どもへの居場所・学習支援の充実は、困窮家庭の生活基盤の改善につながるのか?
  - →改善することが期待されるが、現状その把握は難しい。

#### (達成目標1、2、4に対して)

- Q8. 各協議会メンバーとその所属団体にとって他分野との連携が自組織の活動にメリットがある事を実感・認識すれば、横断的連携が醸成・維持されるのか?
  →地域の既存団体の活動は、その目的や運用方法が長年固定化されているものであり、他分野との連携にメリットを見出すには、大きな変化が必要とされる。フォーラムのようなイベントで、既存団体には属しない住民と地域の課題について議論し続けることが出来れば横断的な連携が醸成される可能性があると考えられる。
- Q9. 多分野の組織が多世代共創を目的としたプログラムやイベントの開発・運営で協働することで、横断的連携は進むか?
  - →多世代共創は、横断的な連携を生みやすいテーマであることは、本年度実施した様々なイベントからも明らかではある。一方、そうしたテーマの重要性やそれを支える体制、資金的な支援を継続的に必要とするものであり、既存の団体や行政組織は必ずしもそうした支援を行うものではない。特に、資金的な支援については、大企業の CSR もしくは CSV を考慮したプラットホームの構築も検討すべきと考えられる。連携に参画する組織内の価値観や運営も合わせて変化、または対応できるような検討が必要である。

#### (2) 各項目の成果

## ①達成目標1、2,4にむけて

(29年度目標)協議会の体制の確立と既存の様々な会議との連携の可能性を探る。

Task1. 協議会の体制確立と既存会議との連携

## 【東京都北区志茂地区】

平成29年度は、北区で9回(平成29年4月~10月は2ヶ月に1回、平成29年11月~3月は

研究開発プロジェクト年次報告書

毎月1回)の協議会と4回の作業部会を実施した。

- 常設の交流の場を定期的に開催するようになるなどそれぞれのTaskに大きな動きが生じなくなったため、4月~10月の期間において協議会を隔月開催へと変更した。11月からは、協議会主催のイベントの実施や作業部会を通じてプロジェクトが進みはじめたことをきっかけに、毎月開催へと変更した。月に一回の頻度というのはかなり負担ではないかと危惧されたが、協議会メンバーが内容をともなった会議であるという認識からか、頻度が多くても欠席者が増えることなく進められるようになっている。
- 北区役所、北区社会福祉協議会、地域包括支援センターと、北区の方針などを確認し ながらプロジェクト終了後の協議会のあり方について明確化することができた。
- プロジェクト終了後も協議会を継続して実施することについて協議会メンバーから合意を得られたため、代表を決めると同時に、地域包括支援センターを中心とした事務局体制と協議会の機能・位置づけについて検討を行った。図 2に示す体制にて協議会を継続させることで合意を得た。
- プロジェクト終了に向けたより具体的な地域への引き継ぎ(今後、事務局として機能する地域包括支援センター職員が主体となる協議会運営)、に地域資源であるまちプロと協議会の関係の整理を行っていくことができた。

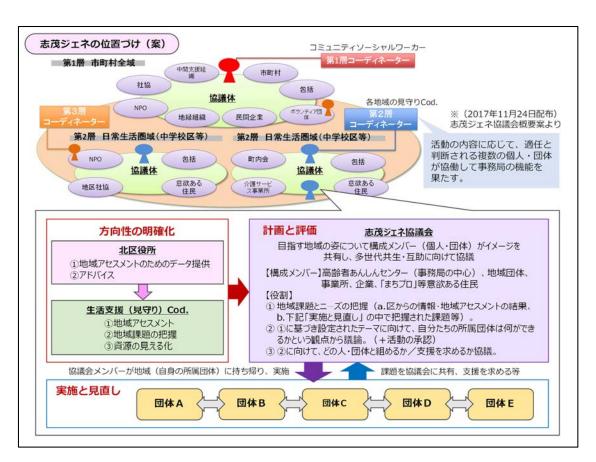


図 2 志茂ジェネ協議会の位置づけ

#### 【川崎市多摩区中野島地区】

- 多摩区では7回の協議会を実施した(表 2)。
- 協議会メンバーのプロジェクトに対する理解が前年度に比べて大幅に向上し、各種イベントや講座の広報活動に積極的に協力して頂けるようになった。
- 最終年度に向けて、事務局業務を区役所、地区社協、地域包括支援センター職員の体制で進められるよう検討が始まり、協議会の持続可能な運営の見通しが立った。
- 平成30年2月24日に「中野島多世代つながり愛フォーラム」を開催した(写真 3)。 このイベントの企画や準備をとおして、協議会メンバーがそれぞれ所属する団体への 広報や参加の働きかけを行い、プロジェクトの認知度が向上した。
- フォーラムの結果、若年世代3名、高齢者世代1名が本プロジェクトの協力者として加わることとなった。
- フォーラムの成果やプロジェクトのことをより地域に周知するためニュースレターを 発行することとなり、中野島地区内自治会回覧用に500部配布した。
- フォーラムがタウンニュース多摩区版で掲載され、プロジェクト啓発の一助となった。 URL https://www.townnews.co.jp/0203/2018/03/09/422822.html



写真 3 中野島つながり愛フォーラム

● このフォーラムを通じて3名のまちプロ候補者が出てきたため、2018年5月に第3期まち プロ養成研修を実施する予定である。

#### ②達成目標 1 [情緒的相互支援]にむけて

(29年度目標) 多世代挨拶運動を中核となって推進する担い手の育成 Task2. 多世代挨拶運動の展開

## 【東京都北区志茂地区】

● 「○○(場所)でいつも会って挨拶や声かけをしてくれるおじさん(おじいさん)・おばさん(おばあさん)」と子どもたちに認識されるような中高年・シニアがモデル地区全域におり、彼らが日常生活の中で草の根的に志茂ジェネの周知および挨拶運動を行う人材の必要性が提起され、具体的に挨拶運動を実践する住民ボランティアを「あいさつさん」として新たに募集した。

- 募集は青少年地区委員会、町会・自治会、民生委員・児童委員、シニアクラブ、「よりあい倶楽部」、地域の小・中学校等へのチラシ配布によって行い、平成29年9月・10月にそれぞれ募集説明会(兼茶話会)を実施した。また、周知の過程で青少年地区委員会主催のラジオ体操等で「あいさつさん」の説明を行い、子どもたちや保護者にも活動をPRした。
- 平成29年3月末までにモデル地区内で約70名の「あいさつさん」を集めた。登録時には、「あいさつさん」のオリジナルグッズとして、平成28年度に公募・決定したロゴマークを使った名札(ネックストラップとネームホルダー)を渡し、活動の際に身に付けるよう求めた。この名札は、平成29年度に新しく製作したグッズで、男女問わず気軽に着用することが可能で、かつ地域の中で特定の役割を付与された人物だと子どもたちが認識しやすいという理由から内容を決定した。
- 平成29年度は、主に個々の「あいさつさん」が地域で挨拶を実践し、活動を展開してきたが、平成30年1月に実施した「あいさつさん」の定例ミーティングでは個人レベルでの活動の限界も指摘された。登録者は散歩やゴミ出しといった日常生活場面や、防災訓練といった地域でのイベントの際に上記の名札を身に付けて挨拶を実践していたものの、まだ「あいさつさん」の周知が徹底されていないという背景もあり、一人でグッズを身に付けて地域へ出ることへの抵抗感を語る者も多かった。
- 課題として、子どもたちへの挨拶・声かけは相手からの反応が全く返ってこないことも多く、世代を超えた相互的なコミュニケーションを実現することの難しさも指摘された。
- 今後は、「あいさつさん」の活動形態を拡大し、チーム単位で挨拶運動を推進するような取り組みも必要と考えられる。今後は、校門前で登校時に挨拶運動を展開したり、登下校の見守りボランティアと連携して通学路で挨拶を行うといった方法を通じて、子どもや保護者に本活動を定着させていくことを予定している。

## 【川崎市多摩区中野島地区】

- 課題として、地区内の小中学校における挨拶運動は協議会メンバーを中心にした地域 住民により推進されているものの、十分な取り組みができているとは言えない。
- 中野島地区で実施している「ポールdeウォーク」参加者を中心とした、地域住民による挨拶運動を実施することによって、学校や保育園と地域との連携を強化することを検討している。

## ③達成目標 2 [手段的相互支援と社会参加支援] 多世代交流を基盤とした多世代住民間互助 の確立

(29年度目標)よりあいの実装から変更し、多世代の地域住民が継続的な交流から互助が生まれる場づくりに必要な要件を解明することを新しい目標とした。

Task3. よりあいの実装

## 【両モデル地区共通課題】

- 昨年度以来「よりあい」の課題としては、①高齢者のスマートフォン利用率の低さ、 ②高齢者のスマートフォン利用方法が限定的であること、③ITリテラシーの対応、④ インターフェース上の問題、⑤ 支援ニーズの問題(低さ・抵抗感)が挙げられた。
- ◆ 介護保険などで受け皿のないグレーゾーン的な困りごと・支援ニーズ(庭の水やり、

家の掃除、買い物等)を「互助」の仕組みに乗せていくことで利用を促すことができる可能性が見いだされた。

- 顔見知りだからこそ、頼みにくいこともあり、中でも家の中に入られることは、知り 合い同士でもハードルが高いことが明らかになった。
- 支援ニーズの低さ・抵抗感に関して、「よりあい」で扱う支援が「頼まないと生きていけない」わけではない内容であるからこそ、本人から頼み辛いことが明らかになった。
- 困りごとをかかえている本人よりも、地域包括支援センターやケアマネージャーや家族等の周囲の人間からの依頼(病院への付き添い等)が入るケースが多いことが指摘されたことを受け、地域包括支援センター利用者家族に対するよりあいの普及および登録後のシステムについて検討することを計画した。
- 平成29年度は「よりあい」の本稼働を開始し、普及に向けて、①「よりあい」導入に至る前段階として、多世代交流プログラムの中で世代を超えた互助を体験できるグループワーク「お互いさまゲーム」を開発し、②北区ではシニア世代のWebシステム登録者を増やすため、「シニアのためのスマホ講座」を開催した。
- 上記と並行して、協議会および作業部会で「よりあい」普及上の課題と対策について 検討を行った。
- 当初計画で予定したよりあいの実装は、様々な取り組みを試行したが、その結果として導入が進まないことが判明した。これを受けて、「よりあい」にこだわらず、多世代交流の場において当事者同士で助け合いに関するマッチングを行える仕掛けや仕組みを開発することとなった。

#### 【両モデル地区共通成果】

a)お互いさまゲーム

- 異なる世代の住民間で「助け合う」ということを体験し、身近に感じる仕掛けの必要性から、「お互いさまゲーム」を開発し(写真 4)、多世代交流の場などで試行した。お互いさまゲームは、①付箋(カード)1枚に1つ自身の困り事を記入する、②記入した付箋(カード)を提示しながら、詳細について話す、③全員で手伝えそうな内容について話し合う、の3つの基本ステップから構成されている。モデル区にて、専門職を対象にした研修にて「お互いさまゲーム」を試行し、研修ツールとしての有効性が認められた。
- 多世代交流の場での「お互いさまゲーム」の実施を通じて、a) 地域の日常生活支援は 一方通行の「サービス」ではなく、「お互い様」の意識を持った支え合いであること、 b) 支え合いは顔の見える関係づくりから始まること、c) 支え手は一人で担う必要はな く、他の人と一緒であれば力になれることを地域住民に啓発するこができた。
- お互いさまゲームを行うことで、参加メンバーがお互いのことをより深く知り合うきっかけとなり、交流の促進につながった。また、異なる世代が日常生活の中でどのような困りごとに直面しているのかが視覚的に明確となり、自分が支援を提供できる内容を具体的にイメージしやすくなった。
- 課題として、グループワークの性質上、同じメンバーで繰り返し「お互いさまゲーム」 を実施することは難しいことが明らかになった。
- 「お互いさまゲーム」実施直後に「よりあい」を紹介し、「よりあい」の普及に努めた が、中高年・シニアはスマートフォンやタブレットといった機器自体の使用に困難を感

じているケースが大半で、「よりあい」を使ったマッチングまで至ることはできなかった。継続して互助の関係性を持ち続けるためには、ゲーム内で提示された困りごとをウェブなどではなく、アナログ的に掲示板などに情報集約し、それを介したマッチングの仕組みづくりを行う必要があるという結論にいたった。



写真 4 お互いさまゲームで困り事を提示

- b)「シニアのためのスマホ講座」の開催
- 平成29年度は、前年度に協議会において挙げられた課題(高齢者のWeb活用が困難であり、講座などを実施しながら普及に努める)に応えるため、北区において「シニアのためのスマホ講座」を開催した(表 3)。
- 講座は、すでにシニア世代に対するスマートフォンなどの使用方法などの講座を開催した実績のあるNPO法人シニアSOHO世田谷の協力のもと実施した。同NPO法人はシニアを対象にしたタブレットやスマホ講座で豊富な実績があり、指導者がシニアであることから、講座の内容だけではなく、日常の使用上での課題など細かなニーズを講座を通じて共有することができた。
- 子育て支援をしているほっこり~の志茂店を会場に開催したことから、よりあい使用 時に世代を越えた互助が展開されることを見越して、近隣在住の子育て世代2名にスマ ホ講座のアシスタントとして参加してもらうことを可能にした。
- 課題として、①iPhoneを使用すると銘打って講座を開催したものの、受講者の多くは 指定以外のデバイスを使用しているものが参加した。また、自身のスマートフォンが何 かを十分に理解していなかった。②講座で使い方が理解できても一人では操作できな いという者も多くいた。③スマートフォンの基本的な操作を習得できた者も、実際に 「よりあい」の登録を行おうとすると本登録のためのメールを受信できない(PCから のメールをブロックする設定を行っている)、パスワードなどがわからず設定変更がで きないなどの困難が生じた。
- 参加者からのニーズとしては、店員からの説明が理解できないといった理由から、スマートフォン購入のためのツアーのようなイベントの開催、個別でスマホ操作の相談ができる場の提供、定期的な「スマホ講座」の開催などが挙げられた。スマホの利用で多くの高齢者がサポートを必要としていながら、家族の間でも相談がしにくい状況にあることが明らかになった。こうしたことから、スマホに関する互助の可能性があること

研究開発プロジェクト年次報告書

がわかった。

Task4. まち・人・くらしプロモーター養成

#### 【両モデル地区共通成果・課題】

- 29年度は、表 4のカリキュラム内容で、まちプロ2期生の養成研修を実施した。2期生は、すでに研修を修了した1期生が、研修修了前から活動や打ち合わせに参加するなど、より実践的な研修を受けることを可能にした。
- 研修を修了した1期生と2期生が合流し定期的にまちプロミーティングを開催し、多世 代交流のイベントや居場所について検討を重ねている(表 7&表 8)。
- 課題として、まちプロは両モデル地区にて活動を展開しているものの、3領域のテストを修了していない者も含まれている。そのため、まちプロとして活動している者に対し、フォローアップ研修の実施、活動の適正に関する客観的な評価基準の検討、まちプロを資格化するかといった活動の質管理の体制を考える必要が生じている。
- 課題として、まちプロ1・2期生の中で活動の継続が困難だった者は、すでに何らかのボランティア活動を精力的に実施している者であった。また、現在まちプロ会議への参加も、既存の活動が忙しく参加率は低い。これまで、広く地域での活動に関心のある人々をまちプロ研修受講者として募集してきたが、3期生からは活動の継続可能性が高い者へ直接受講を促すなどのアプローチを行っていくことで、持続可能な体制を整えていく必要性が明らかになった。

<b>夫</b> 7	小区羊菜物区	<b>またプロミーテ</b>	ィング実施状況一覧
70 I	기 : 1 ~ 하시 ! ♡ 테르! ^	* n / U = T /	1 1 1 <del>1</del> m 1 1 m = 1

日にち	会場	内容	まちプロ参加者
2017/4/24	地域振興室会議室	三丁目イベント	4名
2017/5/15	地域振興室会議室	三丁目イベント	<b>7</b> 名
2017/6/13	三丁目自治会館	三丁目イベント	3名
2017/6/27	地域振興室会議室	三丁目イベント直前最終内容確認	5名(協力者3 名)
2017/7/21	地域振興室会議室	三丁目イベント振り返りおよび今 後の活動について	15名
2017/10/2	地域振興室会議室	よりあいについて、今後の活動に ついて	9名
2017/12/11	地域振興室会議室	一丁目イベント、子育てメッセ、 志茂ジェネまつりについて	8名
2018/1/15	地域振興室会議室	志茂ジェネまつり、子育てメッセ、 常設の場について	5名
2018/2/5	地域振興室会議室	志茂ジェネまつりについて	8名

耒	8	多摩区山野皀州区	まちプロミーティング実施状況一覧	F
1X	0	夕库位中北岛地位	よりノロミーノインノ大心1人ル 見	J.

日にち	会場	内容	まちプロ参加者
2017/4/17	中野島会館	上布田カフェ	5名
2017/5/8	中野島会館	上布田カフェ	5名
2017/5/29	中野島会館	上布田カフェ	4名
2017/8/29	中野島会館	上布田カフェ・ほっこりカフェ・ ノルディックウォーク	6名
2017/11/8	中野島会館	上布田カフェ・ノルディックウォ ーク	6名
2017/12/18	中野島団地集会所	上布田カフェ・ノルディックウォ ーク・つながり愛フォーラム	6名
2018/1/22	多摩川の里	上布田カフェ・ノルディックウォ ーク・中野島ファミリーカフェ	4名
2018/2/9	中野島会館	上布田カフェ・ノルディックウォ ーク・中野島ファミリーカフェ	5名

Task5. 多世代交流プログラムの運用

【東京都北区志茂地区】

#### 多世代交流イベントの開催

多世代交流イベントの実施方法は、①まちプロの企画・運営によるイベント開催、②協議会主催によるイベント開催、③地域団体もしくは行政が主催するイベントへの参画の3種類に大別される(表 5)。

## ①まちプロの企画・運営によるイベント開催

- まちプロ1期生を主体に「多世代でつながる・支える 志茂三丁目防災イベント」を開催した。当該イベントは、モデル地区内すべての町でのイベント開催を目標としたものである。このイベントでは、まちプロがイベント全体の企画、会場の手配、町会や消防署との交渉を実施し、開催に至った。
- 参加者の募集は高齢者世代については協議会メンバーの口コミ、町会の回覧板と掲示板、および協議会参加メンバー所属事務所での掲示である。子育て世代は、協議会メンバーである(株)ほっこり~のの口コミとSNSにより募集した。
- 地域包括支援センター職員がまちプロのディスカッションおよびイベント運営を支援 した。このような関わりを通じて、研究期間終了後もまちプロが地域包括支援センター や地域の主要団体と協働しながら地域人材として活躍する体制づくりのきっかけとな った。

#### ②協議会主催によるイベント「志茂ジェネまつり」開催

- 上記①と並行して、多世代交流や多世代共生の重要性を地域住民に広く啓発したいという協議会の意見から、平成30年3月3日に「第1回 志茂ジェネまつり ~多世代(みんな)で楽しむひな祭り~」(主催:志茂ジェネ協議会、後援:東京都北区)を開催した(写真 5)。
- 主なターゲットである志茂地区近隣在住の中高年世代と乳幼児連れの親子の交流が生まれるようなプログラムの展開を目指し、そのねらいや工夫について、協議会やまちプロ、他団体とそれまでにないレベルの検討をすることができた。
- 地域住民・地元企業からの寄附金およびイベント当日の売り上げを資金源とすることを目標にし、期待以上の寄付金を集めることができた。プロジェクト終了後も継続して開催できる見通しが立った。
- 各ブースの企画・運営スタッフは、志茂ジェネ協議会に参画している地域活動団体を中心に呼びかけ、住民有志43名に協力を得ることができた。また、各団体での呼びかけを通じてプロジェクトの啓発ができ、プロジェクト全体の目的が広く共有される機会となった。





写真 5 志茂ジェネまつり(ひな壇と記念撮影・スタッフ集合写真)

- 来場者に対するアンケートからは、「老若男女、年令関係なく、参加しやすいワークショップばかりでよかった」、「来年も参加したい」といった肯定的なコメントが多く得られた。
- 課題として、親子連れが26組、中高年・シニアの単独参加が15名、その他が6組(小学生の単独参加が1名、祖母との来場が5組)と、相対的に中高年・シニアの来場者数が少なかった。
- 課題として、多世代交流という目的を本イベントがどの程度達成できたのかという点である。当日のスタッフからは、ブースの内容を滞りなく進めることに精一杯で、来場者の交流を促進するまで手が回らなかったという声が聞かれた。また、来場者間だけでなく、企画・運営スタッフ間の交流も十分には出来ていなかったという意見もあった。

#### ③地域活動団体もしくは行政が主催するイベントへの参画

他の地域活動団体もしくは行政が主催するイベントにも参画し、プロジェクトのPRを行った。志茂ジェネ協議会およびまちプロが「北区つながり創造プロジェクト ~多世代でつくる未来~」(平成29年9月10日開催)および「北区子育てメッセ」(平成30年2月23日・24日開催)に参画した。

- 「北区つながり創造プロジェクト 〜多世代でつくる未来〜」は、公益社団法人 東京青年会議所 北区委員会が主催するイベントで、小学校5・6年生以上の児童・生徒を対象に、地元の企業や地域活動団体が職業体験および多世代交流の体験ブースを複数出店した。まちプロのメンバーに青年会議所の委員が複数名在籍していることを契機に、ブース出店という形で志茂ジェネ協議会の参画が実現した。
- 志茂ジェネ協議会のブースでは、町会・自治会、青少年地区委員会、消防団、民生委員・ 児童委員、保護司のメンバー(いずれも中高年・シニア層)が自身の活動内容をクイズ 形式で子どもたちに紹介し、交流を行った。本イベントを通じて、子どもたちが地域活 動に興味を持つきっかけを作るとともに、参加者および商店街を利用する地域住民に志 茂ジェネのPRを行った。
- 「北区子育てメッセ」は北区政策提案協働事業として、北区子ども未来課と子育てママ 応援塾ほっこり~のが共催で実施したイベントである。志茂ジェネ協議会は、実行委員 会の一員として当該事業に参画し、計4回のミーティング・ワークショップを経て、行政 担当者ならびに区内24ヶ所の産前産後ケア・子育て支援関連団体とネットワークを構築 した。
- イベント当日は「多世代(みんな)で楽しむ!ひな祭り工作ワークショップ」と題し、 まちプロ2名と共に、折り紙を通じた交流ブースを出店した。約50名のブース来場者との 交流、およびステージでの発表を通じて、志茂ジェネのPRや先述の「志茂ジェネまつり」 の宣伝を行った。

#### Task5-2 常設型の居場所づくり

- 平成29年度、北区では(株)ほっこり~のと連携して多世代交流サロン「よりあい倶楽部~かよう広場~」を昨年度より継続して実施した(毎週火曜日10時~13時に実施)。よりあい倶楽部には高齢者世代のまちプロ1~3名が運営スタッフとして関与している。
- 高齢者世代との交流経験が少ないほっこり〜のスタッフと利用者が高齢者世代に親近感を持つことを期待して高齢者世代のまちプロに参画してもらってきたが、1年を通し常連の子育て世代との関係性構築、スタッフとも関係性が構築され、円滑な場の運営が実施できた。
- 関係性構築の背景として、第一に、高齢者世代のまちプロが、新規の子育て世代の子どもの名前を聞いてメモをとり可能な限り子どもの名前で声掛けするように心がけるなど、場になじむための努力を行っていたことが挙げられる。第二に、まちプロ自身の役割が明確になり、場の運営に主体的に関わることができるようになったことが挙げられる。よりあい倶楽部を開始してすぐの頃、まちプロ自身は交流を促す、互助の関係性を作るといったプロジェクトにおける役割を理解していたものの、具体的によりあい倶楽部で何をすれば良いかは十分にわからない状態であった。そのため、補助的な役割に終始してしまっていた。しかしながら、まちプロ主体のイベントの実施をきっかけに運営側の立場から実際にイベント内容の一部を担うようになっていった。
- 課題としては、ほっこり~のの従来の利用者が子育て世代であり、よりあい倶楽部の内容も子育て世代向けのものが多く実施されたため、中高年・シニア世代の参加者数が伸びなかったことが挙げられる。
- より高齢者を取り込む場やプログラムの必要性から、次年度は、新たな場の設置を目指

すと同時に①これまで十分に集客できていない中高年・シニア世代をメインターゲットにしたイベントの開催を行う (開始直後から多世代交流を銘打つと、イベント内容や広報方法などが中途半端になってしまうため)。②特に広報に重点を置いた交流の場の実施を行う (参加者が一定数集まらないことには交流が発生しないため)。③個別対応を積極的に行い、居心地が良いと感じてくれた人が口コミで知人を交流の場に誘ってもらうという形でリピーターを増やしていく。

#### 【川崎市多摩区中野島地区】

多摩区中野島では表 6多摩区中野島地区多世代交流イベントのとおり、3つのプログラムや居場所づくりを推進している。

#### 上布田カフェ

- 上布田つどいの家を拠点とした多世代交流は、当初は専門職のミニ講座などを中心に 運営されていたが、現在まちプロを中心にプログラムの内容が検討され運営されている。
- 課題としては、スペースの問題から、子連れの参加者にとっては自由に動けないことが交流の妨げになっている。また、月に1回の頻度のため、継続的な関係性の構築が難しい。
- 課題として、広報は協議会メンバー、まちプロによる口コミと、町会掲示板への掲示 にて行っているが、子育て世代もシニア世代も、参加者の多くは口コミによる参加で ある。広報チャンネルが限定的であることから、十分な参加者増につながっていな い。

#### ポールdeウォーク

- 9月に開催した講座をきっかけにスタートしたポールdeウォークの活動は、地域包括 支援センターの協力もあり、集合・解散時に施設を利用することが可能になってい る。
- 主に講座を受講した修了生によるグループとしての活動であるが、まちプロも参加しているため、今後まちプロを中核として自主グループ活動への転換が見込まれる。
- 地域を歩く活動のため、地域内の他世代との交流プログラムが検討されており、保育 園や小学校との交流、またあいさつ運動への参加などが検討されている。

#### 中野島ファミリーカフェ

- まちプロ会議で、既存の活動(上布田カフェ)に頼らない、まちプロ独自の多世代交流 の場づくりが検討され2018年3月スタートに至った。
- 他のプログラム参加者や協議会メンバー、まちプロの協力が集約されつつあり、29年度 3月に実施した2回とも期待どおりの参加者が集まった。
- 多世代交流に積極的な子育て世代2名が開始前に見つかり、カフェの運営スタッフとして参画している。一般の子育て世代の参加者はいないが、2名の存在により参加している高齢者にとって世代間交流が実感できる場となっている。
- まちプロが主体的に運営できるよう、当日の役割分担や、事前準備、反省会など継続可能な体制が構築されつつある。
- 課題として、始まったばかりで認知度が少ないことから周知が必要である。既に中野島

地区で実施しているプロジェクト関連の事業や、友好関係にある他の活動と連携した広報活動のあり方を検討し始めている。

## ④達成目標4[生活基盤、学習支援、居場所支援]:

(29年度目標)多様な背景をもつ子どもとその保護者も自然に参画できる場づくり

#### Task6. 多様な背景を持つ子の居場所・学習支援に向けて

- 両モデル地区において進めている多世代交流のプログラムや場では、多様な背景を持つ子どもや保護者でも参加できるよう、安価な参加費の設定やプログラムづくりを進めている。
- 北区では、社会福祉協議会が主催する子ども支援ネットワーク交流会へ参加し、区内で子どもの居場所・学習支援に取り組む他の地域活動団体や個人とネットワークを形成することができた。プロジェクトをとおして調査した結果などを交流会などで共有することによって、北区の他団体の活動に貢献している。
- 北区では、ほっこり~の志茂店で平成 29 年 9 月より始まった、子ども食堂の事業へま ちプロが参画し、運営のサポートと来場者との交流を行った(毎月1回開催)。
- 多摩区中野島にて、29 年度より川崎市の事業として小学生を対象に実施されている子 ども食堂と学習支援「こどもほっとスペース中野島」に、2名のまちプロがボランティ アとして参加している。まちプロがプロジェクトの活動のみならず、地域内の他の活動 にも参画し運営や世代間交流に貢献している。

## ⑤達成目標 1, 2, 4にむけて

(29年度目標)各開発活動の検証とマニュアル作成

#### Task7. 評価

7-1.協議会アンケート

● 協議会の運営方法の妥当性、および各回のテーマに関するメンバーの理解度や共感度 を検証するため、各協議会終了時にアンケート調査を実施し、分析を行っている。

## 7-2.学校調査

● 多摩区では、本プロジェクトおよび挨拶運動の学校への波及効果を検証することを目的に、平成30年2月から3月に児童・保護者・教職員を対象としたフォローアップ調査(無記名自記式調査)を実施し、集計中である。当初の予定からの変更点として、北区はモデル地区での介入のスケジュールが後倒しになっていることと、校舎移転等の時期と重なり、学校側の調査実施体制が整わなかったことを背景に、平成30年度に同調査を実施する運びとなった。

#### 7-3.まちプロアンケート

まちプロ研修にて、研修カリキュラムの妥当性を受講生の視点から検証するためのアンケート調査を実施し、分析を行っている。

#### (3) 当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

昨年度より課題であった、「よりあい」の実装が、高齢者のスマホ利用の状況などから、想定以上に困難であることが今年度明らかになった。対策として実施したスマホ講座やお互いさまゲーム等様々な取り組みを行いその課題の解決を試みたが、よりあい登録につなげることが困難である状況に変わりはなかった。結果として、よりあいに頼らない新しい互助の仕組みづくりを目指すことになった。また、多世代交流のプログラムや居場所づくりは、まちプロを中心として運営が定着しつつあるが、集客や各プログラム内容の充実の面で十分とは言えない。前述の互助の新しい仕組みについても具体的な検討を必要としていることから、交流の場から互助につながる全体を支援する体制づくりが求められている。協議会およびまちプロ会議において、最終年度はこうしたテーマを議論し、活動に反映していく予定である。

## 2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

本プロジェクトと同様に、多世代互助の仕組みについては、課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業として大田区で実施している多世代協働による生活支援モデルの開発と社会実装に向けた研究(研究代表:藤原佳典)において取り組んでいる。常設の場における、専門職を介した「よりあい」の試行を実施しており、小規模ながら互助のマッチングに至る機序の解明を進めている。日常生活支援は、「よりあい」のようなウェブシステムを介したものから、掲示板を介したマッチング、民間事業者によるサービス提供など様々な手法が地域では共存しながら展開していくことが考えられる。いずれの手法においても、関係性の構築が基盤となるため、よりあいを使った機序の解明を成果として既に取り組みが進んでいる日常生活支援の活動や、自治体で配置されつつある生活支援コーディネーターなどの研修や業務に活かしていくことが期待される。

各モデル地区の行政や専門機関と共同で実施してきた協議体の運営方法について、首都圏自治体からその取り組み内容に関する問い合わせが多く、具体的には、平成30年度には都内自治体にて、協議会運営の知見を活かし、地域資源の開拓や、交流の場づくり、会議運営に関わるコーディネーター研修を実施予定である。多くの自治体が住民互助の仕組みづくりに苦慮するなかで、本プロジェクトが推進する交流を基盤とした互助モデルに対して高い期待が寄せられており、既に自治体からも本モデルの試行的展開の依頼を頂いている。また、高齢者の日常生活支援を目的とした、多世代の交流の場づくりや、地域の人材活用方法に関する知見について、民間企業の関心が高く、数社とこうした知見を活かした共同プロジェクトの展開を予定、もしくは展開を検討している。

地域多世代共助システムは、3つの重層的な取り組み(あいさつ、交流、日常生活支援)を、まちプロや協議体が推進していくシステムである。各活動のこれまでの知見や成果をシステム全体に活かすために、最終年度は協議会メンバーのインタビューから協議会の運営マニュアル、また交流プログラムの参加者やまちプロのインタビューを実施し、交流プログラムのマニュアルを作成する。各取り組みが共助システム全体として機能するためにこれらマニュアルが不可欠と考えている。さらに、本プロジェクトで推進する重層的な取り組みは、対象とする世代、交流プログラムのテーマ、生活支援の媒体ツールなど地域の課題アセスメントにもとづいて応用される必要がある。企画調査で調査した成果、さ

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域

平成29年度 「ジェネラティビティでつむぐ重層的な地域多世代共助システムの開発」

研究開発プロジェクト年次報告書

らには初年度で実施したあいさつや、生活支援の事例調査で得た知見を最終年度で実施するインタビューと合わせてマニュアルに反映したい。また、前述のとおり自治体では多世代共生社会をにらんだ地域包括ケアシステムのモデルづくりや、コーディネーター等の人材育成のニーズが高いことから、そうした事業の導入や推進に寄与することを想定し、プロジェクトに協力している自治体と活用方法も合わせたマニュアルを成果として提示したい。

## 3. 研究開発実施体制

- (1)藤原佳典(研究代表者及びその率いる)グループ
- ①藤原佳典(東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム、研究 部長)
- ②実施項目
- Task-1. 多世代相互支援推進協議会の運営
- Task-2. 「(仮称) 中高年から始める多世代挨拶運動」プログラムの開発と実装
- Task-3. 子育て・生活支援マッチングWebシステムの開発と実装
- Task-4. 子育て・生活支援マッチングの「まち・人・くらしプロモーター」養成
- Task-5. 多世代交流の場の開拓と運用
- Task-6. 子育て世代の地元介護事業所への就労支援体制の構築と運用
- Task-7. 評価とマニュアル作成
- (2) 福島富士子(子育て支援) グループ
- ①福島富士子(東邦大学看護学部、教授)
- ②実施項目
- Task-3. 子育て・生活支援マッチングWebシステムの開発と実装
- Task-4. 子育て・生活支援マッチングの「まち・人・くらしプロモーター」養成
- Task-5. 多世代交流の場の開拓と運用
  - (3) 野中久美子(生活支援) グループ
- ①野中久美子(東京都健康長寿医療センター研究所 社会参加と地域保健研究チーム、研究員)
- ②実施項目
- Task-3. 子育て・生活支援マッチングWebシステムの開発と実装
- Task-4. 子育て・生活支援マッチングの「まち・人・くらしプロモーター」養成
- Task-5. 多世代交流の場の開拓と運用
  - (4) 渡辺修一郎 (ツール開発) グループ
- ①渡辺修一郎(桜美林大学大学院老年学研究科、教授)
- ②実施項目
- Task-3. 子育て・生活支援マッチングWebシステムの開発と実装
- Task-4.子育て・生活支援マッチングの「まち・人・くらしプロモーター」養成
- Task-5.多世代交流の場の開拓と運用
- (5) 稲葉陽二 (事業評価) グループ
- ①稲葉陽二 (日本大学法学部、教授)
- ②実施項目
- Task-7. 評価とマニュアル作成

## 4. 研究開発実施者

藤原佳典 (研究代表者及びその率いる) グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
藤原 佳典	フジワラ ヨシノリ	東京都健康長寿医療セ ンター研究所	社会参加と地域 保健研究チーム	研究部長
南潮	ミナミ ウ シオ	鳥取短期大学	幼児教育保育学 科	准教授
浅見 素子	アサミモトコ	東京都健康長寿医療セ ンター研究所	社会参加と地域 保健研究チーム	臨時職員

## 福島富士子 (子育て支援) グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
福島 富士子	フクシマ フジコ	東邦大学	看護学部	教授
宗 祥子	ムネ サチ	一般社団法人日本ドゥ ーラ協会		代表理事
市川 香織	イチカワ カオリ	一般社団法人産前産後 ケア推進協会		代表理事
米本 昌子	ヨネモト マサコ	産後デイケアはあとほ っと		代表理事
松永 佳子	マツナガ ヨシコ	東邦大学	看護学部	准教授
岸 恵美子	キシ エミコ	東邦大学	看護学部	教授
増田 知実	マスダトモミ	東邦大学医療センター 大森病院	看護部	主任
田嶋幸代	タジマ サ チョ	東邦大学	看護学部	臨時職員
内海千津子	ウチウミ チズコ	株式会社ほっこり~の プラス	執行本部	代表取締役
野澤智恵子	ノザワ チ エコ	株式会社ほっこり~の プラス		臨時職員
新井可南子	アライ カナコ	株式会社ほっこり~の プラス		臨時職員

平成29年度 「ジェネラティビティでつむぐ重層的な地域多世代共助システムの開発」 研究開発プロジェクト年次報告書

## 野中久美子(生活支援)グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
野中 久美子	ノナカ ク ミコ	東京都健康長寿医療センター研究所	社会参加と地 域保健研究チ ーム	研究員(主任)
倉岡 正高	クラオカマサタカ	東京都健康長寿医療 センター研究所	社会参加と地 域保健研究チ ーム	研究員
杉 啓子	スギ ケイ	NPO法人日本世代 間交流協会		理事長
松永 博子	マツナガヒロコ	東京都健康長寿医療センター研究所	社会参加と地 域保健研究チ ーム	研究員(非常勤)
田中 元基	タナカ モ トキ	東京都健康長寿医療センター研究所	社会参加と地 域保健研究チ ーム	研究員(非常勤)

## 渡辺修一郎 (ツール開発) グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)	
渡辺 修一郎	ワタナベ シュウイチ ロウ	桜美林大学大学院	老年学研究科	教授	
村山 幸子	ムラヤマサチコ	東京都健康長寿医療センター研究所	社会参加と地 域保健研究チ ーム	研究員(非常勤)	
鈴木 宏幸	スズキ ヒロユキ	東京都健康長寿医療センター研究所	社会参加と地 域保健研究チ ーム	研究員(主任級)	
甲田 恵子	コウダ ケ イコ	株式会社AsMama		代表取締役	
高田 佳子	タカダ ヨ シコ	日本笑いヨガ協会		代表取締役	
徳田 武	トクダ タケシ	ノルディックウォ ーク/ポールウォ ーク推進団体連絡 協議会	事務局長		
渡邊 晴子	ワタナベ ハルコ	NPO法人りぷりんと ネットワーク		理事長	

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域 平成29年度 「ジェネラティビティでつむぐ重層的な地域多世代共助システムの開発」 研究開発プロジェクト年次報告書

池内 朋子	イケウチ トモコ	桜美林大学大学院		研究員(非常勤)
根本 裕太	ネモト ユウタ	東京都健康長寿医療センター研究所	社会参加と地 域保健研究チ ーム	職員

## 稲葉陽二 (事業評価) グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
稲葉 陽二	イナバ ヨ ウジ	日本大学	法学部	教授
小林 江里香	コバヤシエリカ	東京都健康長寿医療センター研究所	社会参加と地 域保健研究チ ーム	専門副部長
村山 洋史	ムラヤマヒロシ	東京都健康長寿医療センター研究所	社会参加と地 域保健研究チ ーム	研究員(非常勤)

## 5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

## 5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント なし

## (2) 研究開発の一環として実施したイベント

年月日	名 称	場所	概要・反響など	参加人数
H30/2/24	中野島つながり愛フ	川崎市多摩区中	本プロジェクトの普及	69 名
	オーラム	野島・中野島会館	啓発と新たな担い手発	
			掘のため、報告会とワ	
			ークショップを合わせ	
			たフォーラムを実施し	
			た。様々な地域の課題	
			やこれから取り組みと	
			して期待することなど	
			があげられた。	
H30/3/3	志茂ジェネまつり	北区志茂東ふれ	多世代交流や多世代共	99 名
		あい館	生の重要性を地域住民	
			に広く啓発することを	
			目的に、地域住民や団	
			体の有志からなるイベ	
			ントを開催した。	

## (3)書籍、フリーペーパー、DVDなし

(4) ウェブメディアの開設・運営、

Facebook Page, https://www.facebook.com/ristexgenerativity, 2016 年 1 月開設, 9247 リーチ (4月 1日 $\sim$ 3月 31日)

#### (5) 学会(5-3.参照)以外のシンポジウム等への招待講演実施等

- ・「内閣府 平成29年度 高齢社会フォーラム in 宮崎」、基調講演『高齢者から発進! 世代をつむぐ、三方よしの地域づくり』2017.10.6、宮崎
- ・「城北6区第2回健康寿命延伸支援ビジネス普及啓発セミナー」、『高齢者の社会参加が 導く「三方よし」、高齢者の社会参加と中小企業戦略~』東京商工会議所城北支部、 2017.10.25、東京
- ・「内閣府 平成29年度 高齢社会フォーラム in 東京」、基調講演『高齢者から発進! 世代をつむぐ、三方よしの地域づくり』2018.1.22、東京

研究開発プロジェクト年次報告書

#### 5-2. 論文発表

#### (1) 査読付き(2件)

- ●国内誌 (2 件)
- ・藤原佳典:高齢者のシームレスな社会参加と健康の関連 日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要21-34,2017(査読あり)29(1)
- ・倉岡正高:多世代循環型社会の構築に向けて一仕組みと仕掛けの社会実装一.日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要:99-108, 2017(査読あり)

## ●国際誌 ( 0 件)

#### (2) 査読なし(1件)

・藤原佳典:高齢者の社会参加が導く持続可能な互助コミュニティ聖路加看護学会 誌,2017 (査読なし) 21(2)

#### 5-3. 口頭発表(国際学会発表及び主要な国内学会発表)

- (1)招待講演(国内会議 2 件、国際会議 0 件)
- ・藤原佳典:特別講演:高齢者の社会参加が導く、持続可能な互助コミュニティ第22回 聖路加看護学会学術大会,東京,2017.9.16
- ・藤原佳典:「富山大学 地域連携推進機構 地域医療・保健支援部門10周年記念講演」、『高齢者から発進!多世代で紡ぐ、三方よしの地域づくり』富山大学 地域連携推進機構 地域医療・保健支援部門、富山市、2017.12.2

#### (2) 口頭発表(国内会議 2 件、国際会議 0 件)

- ・藤原佳典:シンポジウム 高齢者支援と子ども・子育て支援の連携によるソーシャルキャピタル戦略-多世代型互助システムの構築-導入編,第76回日本公衆衛生学会総会、鹿児島2017.10.31-11.2
- ・野中久美子:多世代型相互扶助モデル「くらしシェア」の概要.日本公衆衛生学会,鹿児島,2017.10.31-11.2

## (3) ポスター発表 (国内会議 12 件、国際会議 2 件)

- ・村山幸子,小林江里香,倉岡正高,野中久美子,安永正史,田中元基,根本裕太,箕浦明,松永博子,村山洋史,藤原佳典:ジェネラティビティの構成要因と関連要因についての探索的検討-都市部高齢者を対象とした郵送調査の結果から-.第59回日本老年社会科学会大会,名古屋,2017.6.14-16
- ・野中久美子,村山洋史,倉岡正高,村山幸子,田中元基,安永正史,根本裕太,松永博子,渡辺修一郎,小林江里香,藤原佳典:有償生活支援サービスのニーズと生活機能の関連.第58回日本老年社会科学会大会,名古屋,2017. 6.14~6.16
- ・田中元基,小林江里香,野中久美子,村山洋史,倉岡正高,村山幸子,安永正史,根本裕太,松永博子,箕浦明,藤原佳典:高齢者間の世代差から見た他世代との日常生活における支援の授受の検討.第59回日本老年社会科学会大会,名古屋,2017.6.14-16
- ・渡辺修一郎,藤原佳典,小林江里香,野中久美子,倉岡正高,箕浦明,松永博子,村山幸子,南潮,小池高史,稲葉陽二:都市部高齢者の就労および求職状況と高次生活機能との関連.

平成29年度 「ジェネラティビティでつむぐ重層的な地域多世代共助システムの開発」

研究開発プロジェクト年次報告書

日本老年社会科学会第59回大会,名古屋,2017.6.14-16.

- ・藤原佳典,倉岡正高:大都市部における育児と介護のダブルケアとソーシャルキャピタルの関連,日本世代間交流学会第8回大会,熊本,2017.10.7
- ・倉岡正高,藤原佳典:子育て支援行動を受けた経験と地域に対する意識について.日本 世代間交流学会第8回全国大会,熊本学園大学,2017.10.
- ・田中元基,野中久美子,倉岡正高,村山幸子,根本裕太,藤原佳典:介護予防・日常生活支援 総合事業における多様な関係主体から成る協議体の分析:意思決定プロセスの質的分 析.第12回日本応用老年学会大会,東京,2017.10.22
- ・藤原佳典,野中久美子,倉岡正高,松永博子,村山幸子,田中元基,根本裕太,村山洋史,渡辺修一郎,松永佳子,福島富士子,小林江里香:大都市部におけるダブルケアの実態と多世代間の支援の関連,第76回日本公衆衛生学会総会,鹿児島,2017.10.31-11.2
- ・小林江里香,野中久美子,倉岡正高,松永博子,村山幸子,田中元基,根本裕太,村山洋史,渡辺修一郎,松永佳子,藤原佳典:性・年齢層別にみた地域の子育て支援行動の実施状況と 関連要因.第76回日本公衆衛生学会総会,鹿児島,2017.10.31-11.2
- ・倉岡正高,野中久美子,村山幸子,田中元基,根本裕太,渡辺修一郎,藤原佳典:多世代共助システム(よりあい)の開発と社会実装の検証に向けて.第76回日本公衆衛生学会総会,鹿児島,2017.10.31-11.2
- ・村山幸子,倉岡正高,野中久美子,田中元基,根本裕太,安永正史,小林江里香,村山洋史,藤原佳典:児童・生徒の挨拶習慣が居住地域の暮らしやすさと援助行動へ及ぼす影響. 第76回日本公衆衛生学会総会,鹿児島,2017.10.31-11.2
- ・田中元基,野中久美子,倉岡正高,村山幸子,根本裕太,石井義之,安永正史,箕浦明,松永博子,渡辺修一郎,松永佳子,福島富士子,藤原佳典:多様な立場・専門領域を持つ人々から成る会議体における議案進行方法の特徴.第76回日本公衆衛生学会総会,鹿児島,2017.10.31-11.2
- Kuraoka M; Designing Multigenerational Co-creation Community: Developing community-based interventions and the practice in Japan, Generations UnitedMilwaukee2017.6.13-16
- Kuraoka M, Hasebe M, Nonaka K, Yasunaga M, Fujiwara Y: Effective Community-Based Program for Multigenerational Cyclical Support System. IAGGSan Francisco2017.7.23-27

#### 5-4. 新聞報道・投稿、受賞等

- (1)新聞報道・投稿(2件)
- ・タウンニュース川崎多摩区版, 2018年3月9日号
   https://www.townnews.co.jp/0203/2018/03/09/422822.html
- ・ベターケア 『地域共生社会をどうつくる?』 芳林社、2017.10.31

#### (2) 受賞(1件)

・第76回日本公衆衛生学会鹿児島大会ポスター賞:村山幸子,倉岡正高,野中久美子,田中元基,根本裕太,安永正史,小林江里香,村山洋史,藤原佳典:児童・生徒の挨拶習慣が居住地域の暮らしやすさと援助行動へ及ぼす影響.第76回日本公衆衛生学会総会,鹿児島,2017.10.31-11.2

社会技術研究開発

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」研究開発領域

平成29年度 「ジェネラティビティでつむぐ重層的な地域多世代共助システムの開発」 研究開発プロジェクト年次報告書

(3) その他 (0 件)

## 5-5. 知財出願

(1) 国内出願(0件)